



第4号

鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
鎌倉市御成町 20-35
電話 0467 (25) 2611

研究ノート②

鎌倉別荘地時代の幕開け

― 神奈川県知事沖守固の足跡から

鎌倉別荘地時代研究会

奥山信治

はじめに

鎌倉の別荘地形成については、海水浴場の開設や横須賀線の開通が発展に大きな影響をもたらしたことが広く知られている。

鎌倉の別荘地の開拓の契機については、ドイツ人ベルツが明治十三年に七里ヶ浜からの眺望が日本で一番美しいところと日記で記し、保養地としての鎌倉を発見したと言われている。

また、長与専齋が鎌倉の海は海水浴場に最適地と紹介し、明治十七年に自らも由比ヶ浜に別荘を建てており、鎌倉の別荘地の開拓者として知られている。

本稿では、岩倉使節団の一員であり、明治十四年から明治二十二年まで神奈川県令・県知事

を務めた沖守固の足跡を追いながら、鎌倉の別荘地形成過程を記したい(1)。

一、沖守固について

沖守固(おきもりかた・初名貞一郎、後探三、号九皇)は、天保十二年六月十三日、江戸の鳥取藩邸に、同藩絵師の沖一峨の長男として生まれる。明治維新时期に活躍し、明治二年鳥取藩権大参事となる。

明治四年に大蔵省に出仕し、同年岩倉使節随従の理事官田中光顕に随行して、米欧を見学した。途中で一行と別れ、英国に留学し、明治十一年に帰国している。

その後、明治十一年に内務省に出仕し、明治十四年十一月八日 神奈川県令となり、同十九年七月十九日に地方官制により神奈川県知事となる。同二十二年十二月に長崎県知事に任命されるまで、当時では異例ともいえる約八年間の長きに渡り、神奈川県知事を務めている。

在任中は、横浜の日本最初の近代水道の完成、都市計画的法規の作成と市区改正の方向付け、

目次

- ◆ 研究ノート② 1
- ◆ 別荘地時代の幕開け―沖守固の足跡から 1
- ◆ モニュメント④ 原爆慰霊碑 3
- ◆ 平成27年度郷土資料展記録 4
- ◆ 鎌倉アカデミア創立70周年記念祭
― 鎌倉を見つめた写真家たち 8
- ◆ 古文書(山ノ内栗田家文書より) 10
- ◆ インタビュー(むかし語り)④ 11
- ◆ 西御門「村上邸」を守り続けて 故村上梅子さん 11

横浜築港の官費築造などの、横浜の都市整備事情を牽引していった。

その後、滋賀県、和歌山県、大阪府、愛知県各知事を歴任し、また、貴族院議員も務め、明治三十三年に勲功により男爵を授けられている。大正元年十月に、鎌倉で死去(七十一才)している。

二、鎌倉での別荘地形成過程における関わり

○ 土木事業について

沖の神奈川県令・県知事の在任期間は、鎌倉においてもまさに、主要道の整備や新道の開墾が進められていた時期だった。主なものをあげると、明治十六年頃、名越坂新道開墾、明治十九年頃、巨福呂坂切通新道開墾工事、明治二十一年頃、大仏坂新道開通、明治二十二年の横須賀線開通などが挙げられる。

○ 鎌倉の史跡保存等について

明治の廃仏毀釈以来困窮していた寺社の救

済、史跡の保存など鎌倉の復興に貢献することを目的に、明治十八年七月に鎌倉保勝会が設立されている。発起人の筆頭に神奈川県令の沖守固がおり、その後、横浜の有力商人十五名が名を連ね、その他に地元発起人として九名及び円覚寺・建長寺・光明寺・清浄光寺と大寺が参加している。寄付金名簿には、百三十七人の名前が記載され、寄付金の総額は九千三百三十円一〇銭に上る。

この発起人十六名の寄付金合計だけで、七千二百円と寄付額全体の約八割を占めており、横浜で進めた築港事業と同様の枠組みで、鎌倉の史跡保存等に沖守固が関わっていたことが分かる。

なお、この鎌倉保勝会は、関東大震災後の大正十五年、震災復興の象徴と言える鎌倉国宝館の建設に際し、全財産である三千五百円を寄付し、その活動は、鎌倉同人会に引き継がれている。

さらに、鎌倉宮保存会が明治二十二年四月に設立されているが、それにも名を連ねている。以上のように、鎌倉の史跡保存等に、沖守固が一定の役割を果たしていたと考えられ、それには、御用絵師の出自として、文化への造詣と無関係とは言えないだろう。

○土地所有について

沖守固の鎌倉での土地所有については、浪川

幹夫氏の研究(2)において明らかにされている。鎌倉においては、扇ヶ谷字千葉ヶ谷、扇ヶ谷字今小路、長谷字桑ヶ谷に広大な土地を所有し、後にそれぞれの土地は、岩崎小彌太、莊清次郎、山本条太郎に移っている。

なお、沖は神奈川県知事在任中に、大磯に別荘の建築を進めており、大磯の別荘族として、その名が記されることも多い。

当時の土地投機的な動きについて、浪川氏の研究によっても指摘されているところではあるが、沖については、実質的にそのような側面がある一方、実際、大磯に別荘を建築し、また扇ヶ谷今小路に居住している(当該地は、現在、鎌倉の三大洋館の一つである旧莊清次郎邸が建つ場所である)。

大正元年十月七日の沖死去の翌日の『横浜貿易新報』(大正元年十月八日)に、近しい者の言として「男爵は平素投機事件を蛇蝎の如く嫌ひ華族中にて投機に關する者に對し憤慨し居たり」とある。沖については、その人脈を介して、有力な政財界人に土地所有が移っている。このことは、沖が単に土地投機を見込んだだけでなく、有力な政財界人の別荘を鎌倉に誘致しようとする主導的な役割を果たそうとしたとみることもできる。

○地域への貢献

沖は自らの私財を投じて、横浜・大磯・鎌倉

の地域発展に貢献していたが、鎌倉に関するものは、明治二十三年三月に、相模国鎌倉郡諸村に対し、道路橋梁修繕費として金百円寄付していることがみられる。

また、明治四十一年に柴山海軍大将を幹事長として、鎌倉の別荘在住者相互の親睦融和を目的として創立された、鎌倉倶楽部の第二代幹事として活動している。

このように、寄付や地域の活動を通して、別荘地発展に寄与している側面を見出すことができる。

まとめ

最後に、鎌倉の史跡保存や道路整備等に多大な寄付を行い、鎌倉倶楽部の第二代幹事を務め、鎌倉の別荘地発展に多大な貢献を果たしていることが明らかとなった。この活動は、鎌倉同人会をはじめとした、鎌倉の住民自らがまちづくりを牽引していく先駆けと捉えることもできる。

(1) 本稿は、「鎌倉の別荘地形成過程における沖守固の動向について」『鎌倉』第百十八号 奥山信治 鎌倉文化研究会 平成二十七年 を要約し、概要を記したものである。詳細については、拙稿を参照して頂きたい。

(2) 「明治二十年代都人士による土地所有」『鎌倉』第九十三・九十四号 浪川幹夫 鎌倉文化研究会 平成十三・十四年

沖守固関連メモー「鎌倉倶楽部」

鎌倉倶楽部は明治四十一年、急速に増えた別荘の住人によって創設された親睦団体である。初代幹事長は柴山海軍大将であった。沖守固が幹事長をつとめた明治四十二年に若宮大路脇に広い庭付きの大きな建物を建て、活発にサロンや購買組合活動を繰りひろげた。場所は現スルガ銀行南側辺りである。大正十一年の名簿から、会長に陸奥廣吉伯爵、名誉会員に松方正義侯爵、都筑馨男爵を迎え地元の有力量も交えた会であったことがわかる。

倶楽部では家族娯楽会、刀剣会、碁棋会、珠戯会、弓術会、生花会、詩会などが活動していたと、『鎌倉名勝誌』（大正五年 佐成謙太郎著）にある。倶楽部設立の背景には、別荘地に生じる種々の弊害を防ぎ、鎌倉の町の健全な発達をめざすという意図があった。そのころの高い別荘値段に対抗して、購買組合・物品販売部では、ほとんど全ての日用品などを供給していた。小売り商人の暴利を防ぐためとのことである。大正四年当時の決算報告によると、会員会費は毎月二円五十銭、会員は二百五十名。物品販売収入は一万八千二百六十九円に上った。この頃沖守固はすでに亡くなり（大正元年没）郷誠之介男爵・池田豊作らが尽力していた。倶楽部の建物は関東大震災で倒壊した。

（資料室記）

モニュメント

④ 原爆慰霊碑

大船観音寺の山の中腹、古いお堂の下に、3つの被爆者慰霊碑が建っている。被爆25年（昭和45年・1970年）に神奈川県下在住の生き残った被爆者が建てた慰霊碑がもつとも早く、爆心地から運んだ地藏土台石の上に千羽鶴を刻んだ櫓を乗せ、その上に長崎の浦上天主堂から運ばれた被爆石が置かれている。広島原爆資料館から寄贈されたケロイド状の瓦やビキニ環礁で被爆した第五福竜丸の遺品も埋蔵されているという。土台石には人間達がお互いを支えながら丘に登っているブロンズのレリーフがはめ込まれている。「呪わしき原爆の重荷を背負い、この坂を登って平和の丘に向かおう願 原水爆追放 共存共栄」という言葉が彫られ、人々の思いが生々しく伝わってくる。鎌倉では、広島の原爆で幼子を目の前の火の中から助けられなかった無念の父親が碑の建立に力を尽くした話しが伝わっている。

中央左側に一段と大きな石碑が立っている。被爆40周年（昭和60年・1985年）に建てた「平和記念塔」である。建立者は「神奈川県原爆被災者の会」、県知事長洲一二の揮毫で「核兵器もない 戦争もない 平和な世界を」と大きな字が刻まれている。

次に手前右側に茶色がかった大きな石灯籠

があり、「原爆の火」が灯し続けられている。広島で被爆死した家族を探していた人が、近くで燻っていた火を懐炉に移し、福岡県星野村で灯し続けている。その火をもらい、未来永劫、平和を願う「原爆の火」としてこの塔に採火したのが被爆45年7月29日（平成2年・1990年）であった。今秋、第50回慰霊祭が行われた。



平和記念塔（左）と櫓の形をした慰霊碑（右）

櫓の形をした慰霊碑（部分） 「原爆の火」

平成二七年度郷土資料展記録

今昔写真展

鎌倉を見つめた写真家たち

— 鈴木正一郎28年間の記録を中心に

安田三郎・皆吉邦雄の3人展

平成28年2月17日(水)～22日(月)
於鎌倉生涯学習センター市民ギャラリー

6日間の展覧会であったが、会場は連日来場者で埋め尽くされた。半世紀前の鎌倉の町の普通の生活をとらえた写真の中に、不思議な共感を覚え、時間と空間を旅するような心地良いひとときであった。島村國治氏(山ノ内住)撮影の現在写真との今昔対比がおもしろく、写真の前で楽しい会話が生まれていた。

【展示内容】

鈴木正一郎撮影

地域別写真170枚

ジャンル別写真177枚

パノラマ写真4枚・若宮大路巻き物写真2巻

安田三郎撮影 仏像・文士肖像写真等13枚

皆吉邦雄撮影 北鎌倉周辺写真18枚

会場「ごあいさつ」より

このほど図書館に寄贈された「鈴木正一郎氏撮影写真」は、氏が昭和32年から59年までの28年間、仲間たちと鎌倉を歩き、撮りつづけてきた写真です。約50年前の鎌倉の風景や町並み、行き交う人々の様子をくまなく撮影し、変わり行く町の姿をあたためてまいりました。記録しています。寄贈写真はネガフィルム・プリントを合わせて約2万8000点に及び、その中からわずか1パーセントですが、約350点を選び、今昔写真として地区別・ジャンル別に分け展示しました。

鎌倉のひなびた風景、生活する人々、歴史を宿した寺や路地裏の小径に目を向けた写真家は、山々の木々が剥ぎとられ宅地造成されていく姿も追いかけています。28年間、鎌倉を見つめた大量の写真には、定点撮影された貴重な記録が残されています。未来に残したい空間や空気を感じることもできます。

さらに同時代に鎌倉を写した、安田三郎氏、皆吉邦雄氏の写真を展示いたしました。3人の写真家にはそれぞれ接点があり、交流もあつたと思われれます。写真は全て図書館に寄贈されており、整理がすみ次第、順次ホームページなどで公開していくよう進めています。

これら展示写真の前で対話が生まれ、異世代

の方が交流し、さらに未来の鎌倉のイメージを育むことが出来れば幸いです。

当展示開催にあたり、ご協力をいただいた、鎌倉風致保存会、安田三郎写真保存会、鎌倉の別荘地時代研究会、CPCの会、鎌倉同人会、島村國治氏に深く感謝いたします。

特に島村國治氏(山ノ内在住)には膨大な量の写真整理、複写、撮影地点での現代写真撮影など、展示物作成にあたり、多岐にわたるご指導ご協力をいただきました。鈴木氏が撮影した場所にも何度もお出かけ、昔とは違った様子に戸惑いながらシャッターを切っていました。本当にありがとうございます。

寒い中での来館ありがとうございます。
平成二十八年二月十七日 鎌倉市中央図書館





国鉄横須賀線 鎌倉駅東口（小町）

撮影日：昭和 32 年 11 月 8 日 →

横須賀線鎌倉駅は明治 22 年 6 月開業。大正 5 年に三角屋根の新屋舎（2 代目）が完成。現在の駅舎は 3 代目で、昭和 59 年 10 月 3 日落成。写真のころは駅の改札が乗車口と降車口に分かれていた。写真は乗車口。トンガリ屋根の時計塔は現在、駅西口広場に移築復元されている。



展示写真より（詳しくは図書館ホームページで）



鎌倉駅西口前（御成町）

撮影日：昭和 42 年 4 月 9 日 →

映画の看板で賑わっている。映画館の無い今の鎌倉では考えられない光景である。現在のコマビルは昭和 43 年 11 月、御成町では御成ビルに次ぐ 2 番目のビルとして建設。



北鎌倉駅正面（山ノ内）

撮影日：昭和 42 年 2 月 3 日 →

鄙びた小さな駅舎はみんなに好かれている。当時の駅の汲み取り便所はひどかったが、今は整備され、エレベーターまでついている。ここは鎌倉観光の起点である。





観音様が見える大船駅東口（大船）

撮影日：昭和43年10月20日 →

スレート瓦葺きの簡素な駅改札口から大船観音が見えていた。今は道路に覆い被さるような駅ビル、バスターミナル、エスカレーター、エレベーター、駅ナカ商業施設などが整備され、様変わりとなっている。



小袋谷四ツ角（小袋谷）

撮影日：昭和41年7月18日 →

水堰橋は昔から小袋谷と台を結ぶ大切な橋であった。小袋谷側の橋のたもとには、観音像を彫った道標に「享保十二年（1727）右とつか 左藤さわ」とあり、東海道の戸塚宿・藤沢宿への方向を示していた。左の平屋の大きな建物は、米穀を扱う池田屋、現在はコンビニエンスストアなどの建物は他へ移築活用されている。



月影地蔵（極楽寺）

撮影日：昭和41年8月21日 →

極楽寺西ヶ谷の地蔵堂に月影地蔵像が安置

されている。近所の人は「こどもがじょうぶに育ちますように。」とお祈りするそうだ。鎌倉時代の有名な日記『十六夜日記』に記された月影ヶ谷は、西方の別の谷戸であったとされ、谷の入口に石碑が建っている。『日記』には「東にてすむ所は月影の谷とぞいふなる、浦近き山もとにて風いと荒し、山寺の傍らなれば（略）波の音松風絶えず」とある。





鎌倉駅西口派出所付近（御成町）

撮影日：昭和42年6月18日 →

中央に見えるのは諏訪神社の鳥居。

諏訪神社は現在の市役所駐車場あたり、かつては諏訪の森という程に樹木が繁っていた。昭和44年新市庁舎建築の際、鎌倉商工会議所の横に遷座された。写真右奥に見える大木は現在も残っている。



今泉バス停付近（今泉）

撮影日：昭和42年9月29日 →

昭和40年代前半の七久保橋周辺の様子。

当時はここが大船からのバスの折り返し地点であった。太田屋商店は今も続く。店の横にある茅葺屋根が背後の山と調和している。



山崎切通し（山崎）

撮影日：昭和41年8月7日 →

山崎の倉久保谷戸と台の神明神社の裏山にS字に開削された切通しがあった。木洩れ日の下を通ると薄緑色の深い水の底にいるような気分だったという。谷戸奥に窠場を築いた北大路魯山人によって臥龍峡（がりょうきょう）と名づけられた。彫刻家イサム野口も切通し近くに住まいを設けた。「この切通しは暑い夏の盛りでも涼風しきりなり」と鈴木氏の記録にあり。



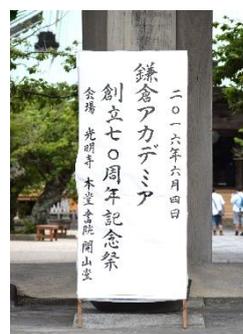
鎌倉アカデミア創立70周年記念祭

平成28年6月4日、ゆかりの地材木座光明寺において記念祭が開かれた。戦後の鎌倉に蒔かれた新しい文化の種が今、世代を超えて広く世界に根付いている。それを実感できる記念祭となった。

〇「あいさつ（お礼とご報告）」より

今から71年前、太平洋戦争が終わり、日本中が廃墟の中から立ち上がろうとした時、海と山に囲まれた静かな町鎌倉でも新しい文化と生活を求めて人々があわただしく動き始めました。GHQの占領下、緊迫した空気のなかで鎌倉の進むべき道を考えた人々が「鎌倉に大学をつくろう」と壮大な夢を描きました。しかしこの夢の実現には多くの困難が待っていました。文学科、産業科、演劇科を設け、最初は材木座光明寺を仮校舎に、2年後には旧大船燃料廠跡に移り学校経営に苦闘し、4年半の歳月で幕を閉じました。

ところが、そこに集った教授知識人と若者達は、戦争中の空白を埋めるべく熱い思いをぶつけ合い、貧しいながらも真理探究と芸術創造の歩みを始めました。その時の「出会い」が彼らを支え、年を経た今も水脈となりあちこちを潤



しています。尊敬すべき教師達との出会いを糧に卒業生達が様々な分野で育ててこられたものを語り

つぎ、次の世代に手渡すため10年前の「60年記念祭」に続いて今回「鎌倉アカデミア創立70周年記念祭」を計画いたしました。

今回の展示とイベント開催にあたり、当大山光明寺様には快くご協力を賜わり、卒業生の方々からは多大なご援助をいただきましたことを心から感謝申し上げます。さらに鎌倉市内外でご活動の皆さまからたくさんのご協賛をいただき誠にありがとうございます。皆様のお力添えにより、全プログラムを無事に終了いたしましたことをご報告させていただきます。

〇書院にて 講演&トーク

* ゆかりの方々よりごあいさつ・ご紹介

加藤茂雄さん（鎌倉アカデミアを伝える会 実行委員長／演劇科1期）。そのほか卒業生、ゆかりの方々から、若林一郎さん（演劇科



2期）、鈴木清順さん（映画科1期）、向井三三子さん（演劇科1期）、平田崑さん、磯見辰典さん、堀久子さん（演劇科2期）、加藤岩男さん、高橋寛人さん（横浜市立大学）、宮岡靖子さん、三枝校長ご家族その他のの方々をご紹介します。

* 講演と座談会「学びの原点をたずねて―鎌倉アカデミア― 寺崎昌男氏（教育学者）／山寄雅子氏（立教大学）／渕上皓一朗氏（岩波書店）

寺崎先生と弟子、孫弟子のようなお三人が、「鎌倉アカデミアとは何だったのか」「あの時代と場所に奇跡的な出会いがあった」「偉大な教師は、学生の心に火をつける」「現代の大学はがんじがらめになっている」など、熱く語り合い、経験豊かな寺崎先生の温かい言葉にまさに「インスパイア」された時間でした。



* 思い出の授業を再現「青江舜二郎先生の悲劇論」 若林一郎氏（演劇科2期生・劇作家）



青江先生は「ディオニソスのデュトランボス」と黒板に書かれて、古代ギリシヤの演劇の起源から「悲劇論」を講義して下さいました。戯曲「オイデプス王」のストーリーから観客の心の中に「恐怖と愛憐の情」を呼び起

こさせて、「カタルシス」を起こすところに悲劇の本質があるんだと。その講義が推理小説のようにおもしろくて、先生の講義を毎回清書するのをなよりの楽しみにしていました。

＊思い出の授業を再現「考古学者 三上次男先生」

服部博明氏（文学科1期生）
三上先生への深い感謝が述べられました。
私塾「白水会」に込められた三上教授夫妻と弟子達の思いを伝えました。



＊「三上次男先生の思い出―白水会で学んだ一人として」 佐々木達夫氏（三上先生私塾白水会／考古学者）

先生は研究を通じて話し合う場を求めまし



先生はこのように言っていました。

た。「鎌倉アカデミアのよ
うな心のかよった勉強仲
間の集団、それは塾、ヒ
ューマニズムでつらぬか
れた、小さな組織。老若
男女を問わず、たがいに
むすびつけてくれる生命
の水のようなものだ」

＊座談会「鎌倉アカデミアから未来の学びの種を蒔く」

ルートカルチャー（有志）／企画制作団体
chameleon／吉野家ほか

鎌倉のまちづくりを考え、フリーペーパー発行や市民カーニバルにとり組む若い人達が、初参加しました。アカデミアのスピリットをいかに受け継ぐか模索しています。経営する食堂で俳句など文化活動を試みたり、家を開いて「お座敷アカデミア」を開講しています。



○午後の部 本堂にて公演など

＊光明寺様 ご法要、声
明念仏、御法主より御挨拶。光明寺様一山挙げて、声明念仏があげられ、本堂内に美しく響きました。鎌倉アカデミア関係物故者全てに対して法要がいとなまれました。感謝。



＊「人形劇団ひとみ座」公演

シローおじさんのひとり芝居「花咲かじいさん」伊東史朗氏／くるしまたけひこ人形劇場
「トラの子ウーちゃん」

今から400年以上昔、室町時代に始まったという箱回しは、首からぶら下げた箱が舞台です。箱の中には楽しいしかけがいっぱい！シローおじさんの話術に、子どもも大人もくぎ付けでした。



次は、「日本のアンデルセン」と呼ばれた久留島武彦の童話をもとにしたペープサート。ウーちゃんとお母さんの心温まるお話でした。



「鎌倉アカデミア70年の軌跡」 たくさんの方が足を運んでくださり、資料を手に取り熱心にご覧になっていました。また、劇団ひとみ座人形制作者 故片岡昌（鎌倉市出身）の作品も展示しました。

○展示の様子 開山堂にて

レは「鎌倉アカデミア学生歌」を会場全体で合唱しました。



＊コーラス 鎌倉市民混声合唱団の皆さんが「鎌倉アカデミア学生歌」・「鎌倉市歌」・「いずみたく歌曲など 混声四部合唱のすてきな歌声をご披露してくださいました。いずみたく（演劇科1期生）の歌曲では「見上げてごらん夜の星を」「夜明けのうた」「恋の季節」の3曲を、ファイナー

古文書

山ノ内「栗田家文書」より

昭和62年に山ノ内栗田文四郎氏より図書館に寄贈された古文書38点には、ペリー来航前後、嘉永4年から文久2年までの慌ただししい村の動きが記録されている。そのうちの「御用留」

光明寺回廊に立つ「アフリカン・マザー」

片岡昌作

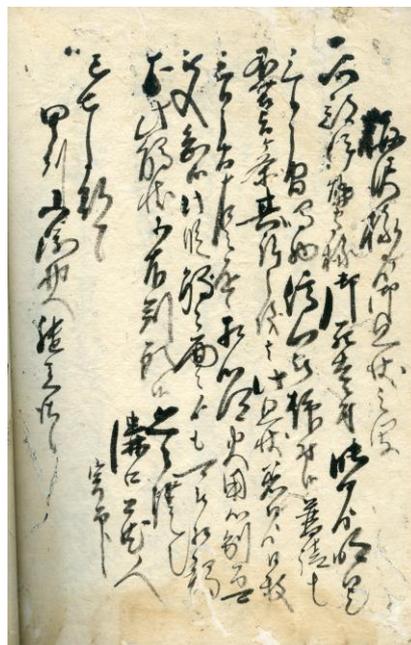


（安政四年）七月朔日の項に、幕府老中阿部伊勢守死去の報が改革組合村大惣代梅澤与次右衛門から山ノ内村名主栗田氏に届き、内容を書き写して、急いで山崎村へ継ぎ送ったことが記されている。

老中阿部正弘の死去は安政4年6月17日であるので、10日余り後に情報が村に届いたことになる。

そこには、この廻状が届いてから前後3日間

は鳴り物停止すること、普請をすることは構わないと書かれている。廻状が届いた日が起点になっているところがおもしろい。この書状の差出人溝口蔵人は、江戸内海防備のため当時山ノ内村を預かり地として治めていた熊本藩の家老である。



（本文）

梅沢様より御廻状之写
 一 阿部伊勢守様御死去ニ付昨日より明日迄三日之間鳴物停止被仰付候、普請は不苦旨右之ヶ条其許之儀は此廻状着日より日数三日之間右之通り相心得、火用心別而可被入念候、此段触之面々よりも可被相触尤此触状可有判形候、恐々謹言
 巳七月朔日
 早刻山崎村へ継立仕候
 溝口蔵人
 実印

インタビュー（むかし語り）

西御門「村上邸」を守り続けて

故村上梅子さん

鎌倉市の景観重要建築物に指定されている（第18号）旧村上邸が平成28年6月、旧所有者村上梅子氏（浩子）により鎌倉市に遺贈され、現在その保全・活用に向けて取り組みが始まっている。

梅子氏は、夫君村上忠助氏とともに昭和16年5月に旧東御門の山裾にあるこの家を購入し、戦中戦後、そして平成26年4月に106歳の天寿を全うされるまで73年間住み続けられた。お能を趣味としていた村上御夫妻は謡のお稽古やお茶会を開き、多くの人と交わりながら過ごした思い出深いこの家を生前から鎌倉市へ寄贈することを希望されていた。

村上御夫妻とこの家の歴史について、平成18年（2006）2月に自費出版された『白寿村上梅子の歩み』に詳しいが、直接うかがったお話しを少しご紹介したい。

“ある日の村上邸”（1）

村上邸に、二代前の居住者中井純氏（89歳）が訪れた。昭和9年から14年まで、純氏の義父中井四郎氏がここを所有しており、懐

かしいので立ち寄られたそうだ。梅子さん（94歳）に招き入れられ話が弾んだ。

この土地に明治期に別荘を建てたのは、日本銀行監査役内田耕作氏であったそうだが（吉田鋼一「村上邸の建築調査報告」による）、二代目が三井鉱山常務の中井四郎氏であった。昭和9年9月28日に購入している。中井氏は日本の化学工業の草分けで、化学染料アリザリンの製造に成功した方である。

中井四郎氏はこの邸宅を別荘として使用した。しばしば若い社員を招いてマージャンなどを楽しんだという。ふだんは別荘番の夫婦が住んでいた。養子の中井純氏は昭和11年から12年頃ここに常住して東京の三井鉱山研究所へ通勤していた。この頃の鎌倉はのんびりしていて、純氏がオートバイを駅に乗り捨てておいても大丈夫だったとのこと。13年に純氏は東京へ（田園調布）引っ越したが、鎌倉が懐かしいので夏の間一か月間、子供づれで由比ガ浜の海浜ホテルに泊まった。純氏は波乗りが得意で、板を使わずに勢いよく波に乗る醍醐味を覚えている。戦時中は大船にあった海軍燃料廠に東京から通っていたとのこと。鎌倉との縁が深い。

中井家の後、森伝次郎氏が購入したが（三代目所有者）、あまり使用しなかったそうだ。村上氏がこの家をさがした時は、海浜ホテルに泊まりあちこちあたってみたという。鎌倉山

の家や雪ノ下の川喜多邸も候補にあがったが、朝日が遅いので決めなかったという。この家に来た時、玄関は殺風景で屋根は茅葺きでまわりは鬱蒼としていた。床は埃で足跡が付くような放置された状態だった。その上風呂はゴエモン風呂だったが、梅子さんは子供時代から田舎暮らしに慣れていたので平気だと思つてここに決めたという。

この日の梅子さんと純氏の語らひは、夕方まで続いた。

“ある日の村上邸”（2）

2001年1月 桜間金記先生のお弟子さん達の新年会が舞台の部屋で行われた。小学生くらいの小さな方も含めて30人ばかりが集まり、次々と舞台上がって謡や仕舞、囃子を披露していった。舞台のまわりには手あぶりが置かれ暖を取るようになっていた。村上梅子さんもお着物で入り口近くに座っておられた。カメラマンの方が遠くからシャッターをきる。硝子戸越しに夕日が差し込み、時間とともに日足が移っていく。凜と冷えた空気の中で冬の夕日をうけながら能を拝見できたことはとても印象深い思い出となった。頼朝ゆかりの地の山裾はこの上ない舞台設定であった。

“ある日の村上邸”（3）

その日は鎌倉在住の女性3人が集まり昔話に花が咲いた。8月の暑い日だったが村上家

の応接間は涼しく、庭を眺めながら時間のたつのを忘れて話し続けた。坂ノ下の海辺の情景、旅館海月楼のこと、震災、海浜ホテルのお茶、八幡前の湯浅貝細工店の創始者湯浅新三郎氏のこと、鎌倉駅前の戦後のようすなど記録にとどめたいことが次々と話された。気持ちよく話せる場所を提供してくださった村上さんに感謝。

“村上家の暮らし”

後日中井氏から提供された図面によると、所在地は鎌倉町雪之下字東御門772番、778番。実測坪数は宅地824坪余、山林302坪余となっている。

村上氏が購入したとき建物は56坪の母屋に29坪の中二階がつながっていた。この中二階部分のちに能舞台に改築される(舞台開きは昭和31年10月18日)。井戸のある中庭を隔てて北側に細長い二階屋があった。上下合わせて36坪余あり階下に和室が3間、階上に10畳の和室が2間あり、貸家にしてきた。西側の茶室を増築して、昭和18年から20年頃まで忠助氏の実父母杉山氏が住まい同居しておられた。中井家の図面によると、さらに西側に敷地の外郭に沿って平屋1棟、土蔵1棟、物置2棟が建っていたが今は残っていない。特筆すべきは中庭の中央に大きな井戸と風車があったことである。その風車で

汲み上げた水は裏山の中腹の水槽に貯められそこから細い鉛管で屋敷内の温室に配水されていた。家の正門の右側に33坪の広さの温室があり、マスカットをつくっていた。浄明寺の方から技師が来ていたらしい。中井家の図面には中二階屋の南側にもうひとつ小さな温室が記されている。温室は中井氏以前、内田氏の時につくったものである。温室は当時の別荘文化の象徴でもあった。

村上家の時代になって昭和30年代に日本庭園内に上野家から住友家ゆかりの茶室を移築した。吉田鋼市氏の「報告」によるとこの茶室は昭和35年7月に上棟した記録があるが、梅子さんのお話では昭和32年秋に一週間にわたり茶席開きをおこなったといわれる。

また村上家の和風のたたずまいは、映画の撮影に使われた。「忠犬ハチ公」では主人が門から出て行くところが撮られたらしい。室内でも撮影や着物の展示会がおこなわれた。

戦時中、梅子さんは大倉、横町、置石、小町、巨福呂坂の五町内の中隊長を任せ、大変まじめに仕事をした。勤労働員の出勤命令が出るると八幡さんで点呼して、日立や富士モーターズへ出かけたが、空襲警報が激しくなってきたからは衣類の整理やボタン付けに変わった。帯芯で鞆作りもやった。大倉稲荷で出征兵士を見送った。貴金属の供出は指輪、時計の鎖、帽子掛けまで馬鹿が付くほど正直に出

した。

戦後は大倉町内の婦人部長をやり、洗濯、染み抜き、洗い張り、お料理の講習会など離れを使って熱心にやった。その後長らく民生委員を引き受け日赤募金の集金などに歩き回ったので人とのふれあいがあつてよかつたと回想された。

平成17年(2005)3月27日(月)「村上梅子白寿自祝の会」が邸内の村上舞台において催され、素謡、独吟、舞囃子、能が披露され、梅子さんも謡と小鼓をもって参加された。瀬戸内寂聴さんのにこやかなお顔もそのお祝いの会の中に拝見できた。(平田恵美記)



舞台(写真左)の外、お庭にも席が設けられ、庭の紅梅もほころぶ3月の晴れやかな「白寿のお祝い」の会

「近代史資料室だより」第4号
発行 鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
平成二十八年十一月一日